

氏名（本籍）	山下 昭洋（福岡県）		
学位の種類	博士（文学）		
学位記番号	甲第 46 号		
学位授与年月日	平成 26 年 7 月 31 日		
学位授与の要件	久留米大学大学院学則第 14 条第 1 項第 2 号による		
学位論文題目	日本統治下台北三市街における明治期の内地人居住地に関する地理学的研究		
論文審査委員会	主査	久留米大学文学部特任教授	堂前 亮平
	副査	久留米大学経済学部教授	浅見 良露
	副査	下関市立大学経済学部教授	平岡 昭利

論文内容の要旨

本論文は、日本統治下の台北三市街（台北城内・^{ぼんか} 艋舺・^{だいとうてい} 大稻埕）における内地人居住地の地域構造の特性を歴史地理学および都市社会地理学の視点から明らかにしたものである。

本論文は、8章で構成されている。

第一章では序論として、研究意義と目的、先行研究、研究方法と研究範囲、用語の定義、本論文の構成について記述している。

本研究はこれまで余り研究がなされていなかった日本統治下の明治期に「台北三市街」と呼ばれていた台北城内・艋舺・大稻埕における内地人居住地に視点をあて、その地域構造の解明と社会空間の地理学的考察を目的としている。

本研究に関連する先行研究の検討では、都市の社会空間に関する地理学的研究としては、ポール・ノックス(1993)¹⁾のロンドンにおけるエスニック集団の研究や、統治民族と被統治民族の住み分けについては、飯塚キヨ(1985)²⁾の主にイギリス統治下のインドの植民地都市の研究をとりあげている。

また、研究対象である台北については、都市地理学研究や人口地理学からの研究、都市建築学・土木建築学からの研究などについても広く先行研究を検討している。なかでも葉倩璋(1994)³⁾の「日本植民地時代における台北の都市計画—統治政策と都市空間構造の変化—」について議論を展開している。具体的には使用された資料は昭和期のものであり、これを基に居住地の分化と社会空間について述べていること、また支配者の権力が集中地区の創出をなしたと述べている点に疑問を呈している。

第二章では、日本統治下の台湾における内地人の分布と推移を分析考察している。とくに漢民族の移民と人口増加に焦点を絞り、その分布および推移を検討している。

その後、日本統治下の台湾における台湾総人口と内地人人口について考察をしているが、日本統治時代に台湾で行われた人口調査の内容を、1905年の第一回臨時戸口調査以前の初期の戸口調査とそれ以降の全島調査期に分けて時系列にその調査内容を整理している。

これを踏まえたうえで、日本統治時代の台湾における内地人の割合を求め、台湾での内地人の位置づけや、相対的な基準を求めるため、同時期の他地域（朝鮮及びアジア地域における西洋諸国の植民地）と比較を行っている。

以上のような検討によって、本島人の人口分布は清朝時代からの開拓を基盤とし、台湾西部の平野全体に広がっていったことを人口分布、人口密度、人口2万人以上の町（街庄）の分布から明らかにしている。また、日本統治下台湾における内地人の集中する堡里および市郡を1897年、1905年、1915年、1925年、1935年、1940年という時代に区切って、それぞれの時代で内地人が集中した社会背景を分析している。その要因としては、分布からみて軽軌道や道路といったインフラ整備と関係していることを明らかにした。

本章では、各種の人口統計関係書を精査し、地図化して分析・考察している。その結果、この時代全期を通して台北に内地人が集中していたことを明らかにした。

第三章は、日本統治時代の台北の都市発展と内地人人口について考察したものである。

最初に日本統治時代以前の台北の市街地形成過程について考察し、台北城内、艋舺、大稻埕の市街地の形成については、日本統治時代の明治期に調査された資料を基に再調査を行っている。また同時に、台北に居住していた本島人住民の社会調査も行った。その結果を踏まえ、大加蚋堡^{とあかあらあ}という清朝時代の地方管轄単位よりも台北城内、艋舺、大稻埕の三市街の発展が台北市の形成に影響を与えていたことを明らかにしている。

また、第二章の研究手法と合わせるために、台北における戸口調査の内容を検討し、次に本島人と内地人の台湾における人口分布の相違性について検証するために、1940年時点で市に昇格していた11市と、1920年より以前に関しては1897年～1919年の、その地に該当する堡里とその他の堡里との人口集中の割合と、1920年～1943年までは市と郡との人口集中の割合を算出し、本島人よりも内地人の方が都市部に人口が集中していることを明らかにした。

さらに台北三市街に焦点を絞り、1897年から1920年までの台北三市街のそれぞれの地区の内地人と本島人の人口の推移を検証し、この時期においては艋舺への内地人人口の流入が多かったことを見出している。

また1903年に出版された『明治三十五年末街庄別調査台湾現住戸口統計』⁴⁾を使用し、台北三市街内の詳細な町（街庄）別人口分布を図示することによって、それぞれの地域において内地人が集中する割合を明らかにした。このデータは、次章以降の分析に使用されている。

本章の最後には、それまでの台北三市街で実施された人口調査を受け、最初に1902年までの台北三市街を取り巻く社会背景から台北三市街の位置付けを決めて、そのうえで『台湾総督府統計書』⁵⁾の資料を駆使しながら、台北の内地人と本島人の職業の違いや、内地人

の出生地や人口構成を詳細に分析している。

第四章では、台湾統治草創期の台北三市街の内地人居住地形成過程を考察している。

台北三市街において内地人居住地が、どのような過程を経て形成されていったのかについて、当時の証言資料を基に、進入経路、居住開始までのプロセス等を多面的に検証している。すなわち台湾割譲決定後の台湾総督府設置までの経緯とその人事を調査し、台北に台湾総督府が置かれるきっかけとそのプロセスを当時の証言を基に明らかにした。その後、官吏や軍夫・軍属等の台北までの進入経路から見た居住地形成過程や、物資輸送の面から見た居住地の形成過程を明らかにした。

また、居住地の機能の研究では台湾総督府軍政時代における商業店舗の立地を解明した。その結果、商業店舗は大稻埕と城内地区に集中しており、艋舺地区への商業店舗の立地は新起街地域にのみに見られただけであった。

この時の内地人の社会空間は、大きくは官吏の社会と御用商人を含む軍夫・軍属の社会と二つに分かれていたことを明らかにしている。

第五章と第六章は台北三市街内地人居住地の復元と社会空間を 1900 年頃と 1911 年について考察したものである。

第五章で研究対象となった主要文献は、1900 年の『台湾士商名鑑』⁶⁾と、1902 年の『明治三十五年末街庄別調査台湾現住戸口統計』⁷⁾である。

本章の最初の部分では、国際情勢、台湾及び台北三市街とその周辺のインフラ、内地人における同時期の社会背景を検討している。この検討によって、同時期における内地人居住地の社会的な因子を抽出している。

そのうえで『明治三十五年末街庄別調査台湾現住戸口統計』⁸⁾の人口統計を用い、台北三市街における町（街庄）別の内地人と本島人人口の分布を地図上に復元し、各町（街庄）における種族構成の差異の出現要因を分析している。

また『台湾士商名鑑』⁹⁾では台北三市街における商工業店舗の立地を復元し、商工業店舗と業種別の立地を分析し、内地人商工業店舗と本島人商工業店舗の地域別、業種別の詳細な検討を行っている。

また、台北三市街の 1895 年から 1903 年までの 3 時点の地図を資料として、市街地拡大を捉えている。

さらに 1900 年頃までの内地人と本島人の社会の特徴を分析するために、民間内地人による内地人組合の創設から解散までを調査し、また、同時期の内地人社会における花柳界や興行についても考察している。

第六章では、まず人口統計を用い人口分析を行ったあと、台北三市街における 1911 年の商工業店舗立地について、『台湾商工人名録』¹⁰⁾を使用し、1900 年次との比較をしている。

また、1902 年以降の内地人の社会空間を調べるため、この時期に設立された、各種の団体を調査することによって分析を進め、本島人の社会空間の調査では、「台湾日日新報」¹¹⁾の記事を検索し、本島人の風俗が変化してきたことを明らかにした。

第七章では、明治期における台北三市街の花柳界の社会空間の変遷について考察したもので、台北三市街に花柳界が出現するまでの経緯、その後の花柳界の勃興期から全盛期へ、最後に安定期に入るまでを、新聞記事、文献に記載されている花柳業関係店舗の調査によって、統計的な分析、立地分布の地図化を行い考察している。

また、花柳界内の社会構成を、台北三市街のそれぞれの花柳業関係店舗の立地を比較し、台北城内・艋舺・大稻埕の各地域の花柳界の性格に差異があること、艋舺が花柳業界の中で大きな比重を占めていたことを明らかにしている。

これらを踏まえた上で、艋舺における芸娼妓の社会空間を分析し、艋舺においても芸妓の社会空間と娼妓の社会空間といった二つの異なった社会空間が存在していることを見出している。最後に雇用主間の力関係も花柳界に大きな影響を及ぼしていることについて考察している。

第八章の結論では、本論文で研究した日本統治時代の台湾及び台北における内地人の分布並びに推移の再考察と、明治期の台北三市街の内地人居住地形成と居住地の構造の解明を複合させることにより、明治期の台北三市街の社会空間を、内地人と本島人、内地人の総督府官吏と商人、内地人社会と花柳界の複数の社会空間が絡み合っ一つ大きな社会を形成していたことを証明した。

最後に今後の課題について記している。

注

- 1) ポール・ノックス著・小長谷一之訳 1993(上) 1995(下). 『都市社会地理学(上下)』 地人書房.
- 2) 飯塚キヨ 1985. 『植民都市の空間形成』 大明堂.
- 3) 葉倩璋 1994. 日本植民地時代における台北の都市計画—統治政策と都市空間構造の変化—. 経済地理学年報 40(3) : 38-55.
- 4) 台湾総督府総督官房文書課 1903. 『明治三十五年末街庄別調査台湾現住戸口統計』 台湾総督府総督官房文書課.
- 5) 台湾総督府民政部文書課 1899~1944. 『台湾総督府統計書』 (1897年版~1942年版) 台湾総督府民政部文書課.
- 6) 上田元胤・湊靈雄共編 1900(1901). 『台湾士商名鑑』 にひたか社.
- 7) 前掲 4)
- 8) 前掲 4)
- 9) 前掲 6)
- 10) 杉浦和作 1912. 『台湾商工人名録』 台湾商工人名録発行所.
- 11) 台湾日日新報社 1898~1944. 「台湾日日新報」 台湾日日新報社.

論文審査の要旨

申請者山下昭洋氏の論文「日本統治下台北三市街における明治期の内地人居住地に関する地理学的研究」は、地理学研究の中では歴史地理学および都市社会地理学といった分野に位置づけられる。

本研究の目的は、日本統治下の台北三市街（台北城内・艋舺・大稻埕）における内地人居住地の地域構造の解明とその社会空間の特質を明らかにすることである。すなわち場所・地域・空間といった視点からの研究であり、これまでもエスニック・セグリゲーションのような都市における民族の住み分けに関する研究は、主として欧米において盛んに行われてきた。また割譲地や植民地を対象とした研究においても、地理学分野では植民地都市の研究は多数見られるものの、意外にも、日本統治下の初期の台北に関しての研究は少なく、本論文はこれまでの研究の空白部分を埋めたものと言える。

具体的には、1895年6月の台湾総督府施政開始から、内地人の居住地がどのような過程を経て形成されてきたのか、また、内地人居住地の特質はどのようなものであったのかについて、詳細に論述している。

その研究成果として、次のような点を解明したことがあげられる。

①日本統治時代の台湾および台北における内地人の分布と推移

(ア) 1896年から1945年の49年間の人口統計を用いた分析により、日本統治時代の台湾における本島人と内地人の人口分布を地図化し、その全体像の分析を行った。

本島人の分布が清朝時代からの開拓地域を基にして、台湾西部の平野全体に広がっていたことを、人口分布、人口密度、人口2万人以上の町（街庄）の分布から指摘した。内地人の場合は都市部に集中しているが、その要因を分布からみて軽軌道や道路といったインフラ整備と関係していることを解明した。

(イ) 台北三市街内の町（街庄）別の人口分布の調査により、台北城内の商業地域にも本島人が僅かだが居住していたこと、艋舺の内地人居住地が二つに分かれていたこと、大稻埕にも内地人居住地が形成されていたことなどを明らかにした。

②明治期の台北三市街の内地人居住地形成と居住地の構造

(ア) 内地人が三市街のそれぞれの地区に居住し始めたのには、本島人の移動と因果関係があった。その後、内地人はそれぞれの居住場所を起点として、官吏・軍人、軍夫・軍属、商人といった内地人の住み分けが始まったことを解明した。

(イ) 台北三市街の商工業店舗の街庄別の立地場所を確認し、各町（街庄）の機能を明らかにした。

また1900年と1911年の約10年間の店舗立地について、その変化も論述した。

③明治期の台北三市街における内地人と本島人の社会空間

明治期の台北三市街における内地人居住地の社会構造を調査した結果、内地人の居住地の社会構造は多重構造であった。とくに官吏、一般内地人、花柳業界の大きな三つの柱

が存在し、それらがそれぞれ小さな社会空間を有し分化、発展していたこと、これらの社会空間は複雑に絡み合って構成されていたことを明らかにした。

本研究は、歴史地理学の側面も持っており、空間の歴史地理学的解明にはさまざまな資料の分析が必要となる。論者は明治期に出版された資料（政府刊行物、新聞等も含む）や回顧録や日誌、随筆等を、日本国内や台湾での現地調査によって収集し、克明に分析している。たとえば1898年に台湾事務局（東京）から出版された『台湾事情一斑』などは、統治開始初期段階の本島人人口の分布を探るうえで貴重な資料となっている。

本論文では、多くのデータを地図化しており、それに基づいて議論が展開されている。本論文で作成された多くの地図は、今後の台湾研究においても活用される大きな成果といえる。

このように本研究論文は、長年にわたり現地の大学に勤務する傍ら多数の資料を収集し、それらを克明に分析することによって結実した労作である。

以上から、本研究は博士論文として相応しい内容を備えたものであるといえる。しかし、本研究には、残された課題もある。

たとえば、本研究では台北市における内地人の居住地に的を絞ったものであったが、台湾の他の都市についても明らかにできれば、その比較によって台湾全体の特徴を明らかにすることができよう。また、台湾以外の日本の統治下地域との比較も今後に残された重要な課題である。

山下昭洋氏は、これまで日本と台湾の地理学会等において研究発表を行い、学会誌に論文が掲載されるなど、学会活動も活発に行っている。今後のさらなる活躍を期待したい。

審査結果の要旨

平成26年（2014年）6月1日（日曜日）午後1時から4時まで久留米大学御井学舎第2会議室において開催された口頭試問および審査委員会により、山下昭洋氏の論文が博士（文学）の学位に値する研究であることを審査委員会は全員一致により確認した。